

## 特攻基地とミサイル基地

### その3. 鉄田義司日記に見る特攻機発進の記録



2019年4月21日 FB ページに投稿

八重山戦で石垣島が猛爆を受けたのは、特攻機が発進する軍用飛行場があったからでした。その特攻機の飛来・発進を日記に書きとめていた人がいます。1941年に陸軍少尉として西表島船浮要塞砲兵連隊に配属され、1944年9月から石垣島に移り、於茂登前山の陣地で砲兵隊長をつとめた鉄田義司さんです（1943年9月に中尉、1945年8月に大尉に昇級：竹富町史資料「鉄田義司日記」、2000年）。大本小学校近くの山腹にあったという鉄田さんたちの砲兵陣地からは、陸軍白保、海軍北（平喜名）、南（平得）の3飛行場が良く見渡せたらうと思われます。

竹富町史資料集①  
鉄田義司日記  
— 船浮要塞砲兵連隊の軌跡 —



於茂登前山の  
高射砲砲座から東方  
を眺望。遠くにカラ岳が見える。

鉄田義司日記（左）と、同書にある於茂登前山からの眺めの写真（上）

この時期、沖縄近傍の海と空は、さながら「特攻戦の戦場」と化していました。沖縄戦時に大本営が発動した「天号作戦」の「菊水」第一号から第十号に及ぶ航空攻撃で、陸海軍合わせて1,827機が特攻を実施し、3,067名が戦死したと言われます（Wikipedia「菊水作戦」）。当然、米英側の犠牲も小さくはなく、特に、先島攻撃の主力を担った英国艦隊は、4隻の空母に5機の特攻機が命中するなど、米国艦隊と比べても大きな損害を受けました（赤木、2010）。

この特攻には、石垣島の軍用飛行場からも多くが参加したはずですが、特攻機についての目撃証言は、おおむね、隊員が宿所とした白保集落の人たちや、滑走路修復作業に従事した「みのかさ部隊」の参加者に限られ、市内で広く語り継がれているとは言えません。空爆と艦砲が飛行場に集中していたことは、誰もが知っているのですが。その原因は、軍事作戦の機密に加えて、特攻機が、英米軍機の目を逃れて、夕方から夜にかけて台湾から飛来し未明に発進していったために、人々が気づきにくかった事情もあるでしょう。しかし、鉄田さんの日記には、特攻機の飛来と発進が日付入りで生々しく記されていました。

鉄田日記から、特攻機に関する記述を抜き出したものを、文末に資料として示します。

伊舎堂用久大尉（後に中佐に昇進）らによる沖縄戦最初の特攻を伝えたと思われる 1945 年 3 月 27 日の記述に始まって同年 5 月 29 日まで、伝聞や推測も含めて計 9 回の飛来・発進を記しています。毎回複数機が到着して、一時的に英米軍機が姿を消した状況も書いています。飛来機の数については、別の資料に「二十機内外のこともあり、又十機内外のこともあった」という証言もあります（石垣市総務部市史編集室による「市民の戦時・戦後体験記録 第四集」の「1945 年戦争に於ける八重山群島のマラリアに就いて」）。6 月に入ると、日記からは「友軍機」の記述が消えますが、おそらく、台湾でも、使える飛行機の数に底をつく状況になったのでしょう。

鉄田日記からは、石垣島の特攻出撃は、何十機にもものぼったと推測されます。そのうち陸軍白保飛行場から突撃したことがわかっている 31 人の氏名は、伊舎堂用久中佐顕彰碑に刻まれています。これだけの数の特攻機は、英米艦隊にとって脅威でした。だからこそ、連日軍用飛行場を爆撃し続けたのです。

特攻機に関する記述ではありませんが、5 月 19 日（p408）の日記は、

「連隊長官舎に将校一同集合。戦況と戦訓の説明あり。」

（中略）

「以上を総合し... （中略） 先島諸島も特攻基地として敵の目標となり、新上陸を目途せるものと判断せらる。」

そして、6 月 1 日（p414）には

「緊急会合あり。〇九〇〇将校全員本部に集合す。

『敵ハ六月上旬先島地区ニ奇襲攻撃ノ企図アリ。 （中略） 』

既に本日石垣町民を退避命令し、旅団は本格的対敵行動に立ちたり。」

と書かれています。

これらは、「一般住民は 6 月 10 日までに、軍の指定地に避難せよ」という旅団命令（6 月 1 日）の背景に、「特攻基地として敵の目標となり、新上陸を目途せるもの」という判断があったことを示しています。だとすれば、マラリア有病地への強制避難命令の原因のひとつは、特攻基地の存在にあったと言えるでしょう。

さらに、その後の鉄田日記には、6 月 23 日に沖縄本島で第 32 軍の組織的抵抗が終わってから、英米軍機の攻撃が急減したことも記されています。沖縄本島での米陸軍の戦闘支援のために張り付いていた米太平洋艦隊が北上を開始し、台湾方面からの特攻の脅威が減ったからでしょう。これは、特攻基地の存在以外には、石垣島に「狙うに値する」軍事的意味はなかったことを物語っています。逆に言えば、本来「狙うに値しない」島でも、対艦攻撃兵器を置けば、有事には攻撃されざるを得ないということです。ところで、八重山戦の期間に爆撃や機銃で死亡した石垣島住民の数は 113 人で、戦争マラリアによる犠牲者 2,496 人よりはずっと少ないものでした（大田静男 「八重山の戦争」 pp321, 322）。これは、英米軍の爆撃が主に軍用飛行場に集中し、市街地や他の地域への攻撃は限定的だったからです。

しかし、いま配備が計画されている「現代版無人特攻機」である陸上自衛隊の地对艦ミサイルは、車載式で、6 基のミサイルを積む大型の車両 4 台程度が基地を出て島内各地に展開し、発射、移動を繰り返します。ほかに、中距離地对空ミサイル車両 3 台程度もこれに加わります。そこで、有事にこれらを潰そうとする相手のミサイル攻撃も、主要道路を中心に島中に加えられるでしょう。当然、住民の犠牲者は、多くなると予想されます。



於茂登前山に残る高射砲砲座跡  
大田静男著 「八重山の戦争」より

+++++

**資料：「鉄田義司日記」における特攻機離着陸関連の記録**

1945年3月27日 p374

「沖縄本島には南方海上に四機動部隊と輸送船約百隻ありと。我特攻隊出撃せり、と情報あり。慶良間諸島上陸は続行中。」

(これは、恐らく、3月26日早朝に白保飛行場を離陸した伊舎堂用久大尉の特攻出撃のことと思われま

1945年4月1日 p377

「夕方より友軍機多数、白保飛行場に着陸せり。台湾よりの来援なるべし。明払暁は恐らく特攻隊となり出撃の種類ならん。」

1945年4月2日 p378

「昨夕来着の特攻機が出撃するのであらう。夜半から爆音頻りにして払暁の目覚めを妨ぐも行き来還らぬ尊ひ此の爆音には感謝の外なし。」

1945年4月11日 p384

「本日の来襲は比較的緩なるものの如し。夕刻より友軍機制空し、久しぶり和やかなる空を見たり。川原部落に銃爆撃あり。」

1945年4月12日 p384

「珍しく敵機の来襲なし。  
先月下旬より連日の来襲が初めて今日に至りその影を見せず、何か忘れてるものの如し。  
恐らく友軍の反撃ありしものならん。夕刻より軽快に友軍機飛翔せり。お陰で燻煙を盛んにし蚊を追ふ。

情報入らず本島の戦況に好転をほのかに感ずるも  
二十一時受領情報  
敵機動部隊二群、石垣西南百軒二アリ。  
敵戒ヲ要ス。本夕我特攻隊之ヲ攻撃セントス。  
嵐の前の静けさなりしか？何ぞ余りに敵の近かる!!」

1945年4月15日 p386

「起床の号音と同時に来襲せる敵機の数は三十余、反復来攻し来り。十一時頃まで絶えず待避壕内に在

る。午後も終始少数機を以て来襲す。十七時過ぎる頃友軍機四機来れば、いつの間にか敵機の影没し、心強き友軍機の飛翔を高天に見る。

夕食後楠陣地に乗馬にて向ふ。絶えず友軍機連着し来る。

明日の特攻隊なるべし。」

1945年4月16日 p387

「一八三〇空襲解除なり、友軍特攻機が今夜も到着しつつあり。」

1945年5月4日 p394

「暑気きびし。楠陣地を巡視。作戦命令に依り、石垣守備隊は天一号航空作戦に密接協力の為、その重火器の大部を白保飛行場周辺に展開し、敵機撃滅を企図す。之が為、我等砲兵隊の一部之に参加の為、その白羽の矢を我中隊に下る。

即ち曰く。『鉄田隊長ハ桜陣地ヲシテ対空射撃ニ任ゼムヘシ』。」

1945年5月10日 p399

「夜、友軍機が唸ってゐる所を見れば今暫く我方の有利に傾いてゐるのであらう。」

1945年5月13日 p401

「夜明けまで友軍機の音が続いてゐた。多分特攻機の出発ならん。それに続いて敵少数機の来襲あり。正午に戦爆連合の来襲。」

1945年5月29日 p413

「敵艦砲射撃に目を覚まし数を数える内四十発を超ゆ。

弾着は近く聞こゆるも、起きて見ず爆音とともに止む。

友軍機飛翔せるにや、夜二十三時前なりと覚ゆ。」

+++++

・鉄田義司日記 竹富町史資料集① 発行 2000年3月31日 竹富町役場

編集 竹富町史編集室

・赤木完爾 「イギリス太平洋艦隊始末 一九四四 - 一九四五年：連合戦争の政治・戦略・作戦」 慶應義塾大学法学研究会 法学研究：法律・政治・社会 Vol. 83, No. 12(2010. 12), p57-82

・「市民の戦時・戦後体験記録 第四集」 編集 石垣市総務部市史編集室 発行 石垣市役所

「1945年戦争に於ける八重山群島のマラリアに就いて」(八重山民政府衛生部 医学博士吉野高善、黒島直規)

・大田静男著「八重山の戦争」、南山舎、1996